

さん とう め 三 斗 目 遺 跡

調査の経過

三斗目遺跡は豊田市の東部、坂上町に所在する。

豊田市は矢作川が南流する沖積平野を市域の中央として、その周囲には丘陵地帯が展開している。その東部丘陵地帯を南北に流れる巴川に注ぐ仁王川の形成した開析谷の南斜面に三斗目遺跡は位置している。遺跡は仁王川沿いの谷を本谷としてそれに合流する支谷の形成するY字状をなす地区のちょうど合流部にあり、標高は約200mを測る。遺跡付近は水田が山裾まで造成され、しかも段差の大きいところも存在していたので、削平された部分のあることが予想された。

本調査は仁王川の改修工事に伴う事前調査として実施したもので、期間は平成3年11月から平成4年3月までの5ヵ月を要した。

調査の概要

三斗目遺跡はすでに『松平町誌』に縄文時代後期の遺跡として紹介されている。豊田市教育委員会による試掘では包含層の存在が確認されていたので、耕作土の表土はぎは注意深く実施した。

調査区の西側約3分の1は包含層はすでに削平されてなく、耕作土直下でベース面の検出となり、そこでは小穴の点在が確認された。東側3分の2では耕作土直下から河原石が露出し、一部は水田床土に突き出していた。河原石には集中地点が認められるとともに、包含層も20cmから30cmほど存在していた。調査区北縁では大量の縄文土器を含む黒褐色土と砂層がラミナを形成する旧河道が検出された。

調査は包含層中での遺構検出が困難であったので、土器・石器などの遺物は出土地点を記録しながら取り上げた。ところどころ集中地点はあったが、1月の厳冬期になると凍結・霜などによって遺物の損傷が著しくなったので、出土状態の記録をとることはきわめて困難であった。包含層は基本的には縄文時代後期に属するのであるが、中世陶器が包含層中に含まれている部分があり、一部中世に攪乱されている可能性を示した。

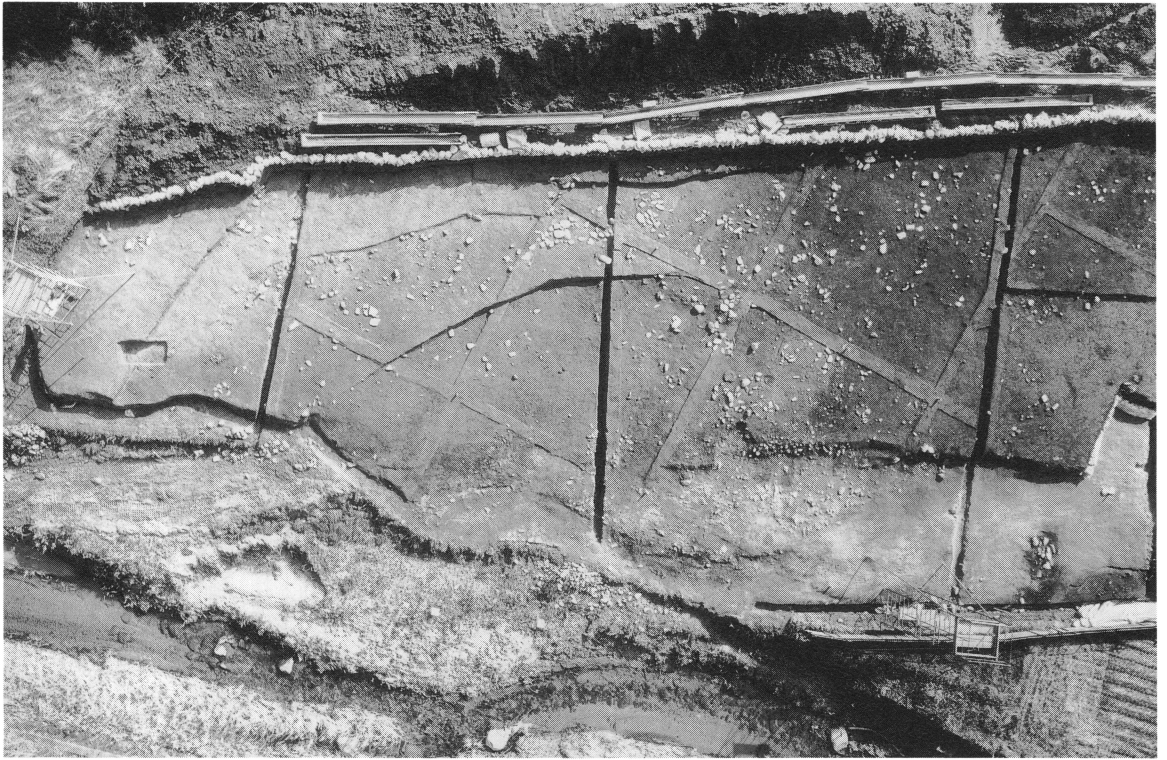
包含層中において検出した集石は、ベース面における掘り込みの有無を確認するまで除去しないで調査を進めた。その結果集石の下部では土坑の検出が相次ぎ、多くの集石が実は土坑埋土上部に置かれたものであることが判明した。しかし、そのことはかえって土坑を伴う集石に、縄文時代ではなく中世に築かれたものが含まれている可能性を生じることになった。実際中世陶器の椀・小皿が置かれた状態で出土した地点があり、包含層も二次

的に移動している部分もあることから、包含層中での遺物のありかたの検討が重要となった。

集石以外に検出された遺構には、包含層下部で検出された土坑、石囲炉および住居跡、ベース面直上に構築された石敷炉があり、これらは縄文時代後期であることが確認された。

ところでベース面は調査区の西部3分の1が砂礫混じりの粘土層、東部は黄灰色砂層であった。さらに深く断ち割った結果、ほぼ調査区に重なって旧河道が検出された。

以上概要を述べたが調査は終了してまもなく、来年度には報告書の刊行を予定しているのでそこで詳しく報告することになろう。(石黒立人)



三斗目遺跡発掘区全景